

京都大学教育研究振興財団助成事業 成 果 報 告 書

2020年 1月 29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 京都大学大学院生命科学研究科

職 名 教授

氏 名 石川 冬木

助成の種類	平成 31 年度 ・ 国際会議開催助成			
国際会議名	第78回日本癌学会学術総会			
開催期間	2019年 9月 26日 ～ 2019年 9月 28日			
開催場所	国立京都国際会館			
参加者	総数 4,754名	内 訳 会員(一般):2,304名、会員(大学院生):627名、 非会員(一般):661名、非会員(大学院生):176名、海外:343名、 学部学生:97名、招待・無料参加者:227名、企業:141名、 プレス:30名、市民公開講座:148名		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	事業に要した経費総額	189,860,176 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 参加登録費、学会補助金、企業協賛費、 日本製薬団体連合会寄附等		
	経費の内訳と助成金の使途について			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	事前準備費	39,679,485		
	当日運営費	135,268,187	1,000,000	
	事後処理費	783,205		
納税準備金	3,000,000			
全体進行管理費	7,925,223			
学会本部へ返金	3,204,076			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) いただきました助成により、大変有意義な国際学会を開催することができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。			

成果の概要 / 第 78 回日本癌学会学術総会 学術会長 石川 冬木

2019年9月26日～28日の3日間にわたり、The 78th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association (第78回日本癌学会学術総会)を国立京都国際会館(京都市)において開催しました。本学術総会では近年進展が著しい「がんゲノム」、「がん微小環境・転移」、「免疫チェックポイント」といったトピックスを中心に提起し、がんが再発・浸潤・転移を繰り返すことを阻止し、全ての患者が安心して治療を受けられることを目標に、国内外の著名ながん研究者を招聘し、さまざまな研究領域・研究手法の相乗的効果によって導かれるがん克服の戦略を、具体的かつ体系的に議論しました。特に「英知を結集してがん克服に」という標語を掲げ、これまで行われてきた伝統的な研究手法だけでなく、生命情報学、システム生物学やAIを活用した新手法なども議論に加えることで、次世代につながる新展開も目指しました。参加者総数は4,700名を超え、総演題数は2,037(口頭発表数850、ポスター数1,187)となり、下記に述べるように注目の演題も数多く、盛会に終えることができました。

初日のコアシンポジウムでは、Microenvironmental stress (腫瘍内微小環境ストレス)のセッションにおいて、私の他、原田浩博士(京都大学)、William McKenna 博士(Univ. of Oxford)から、腫瘍内の微小環境変化に着目した新たながん治療戦略につながる最新の知見について発表がありました。さらに本総会直後に2019年のノーベル生理学賞受賞の知らせがあったGregg Semenza 博士(Johns Hopkins Univ.)からは、細胞内低酸素感知メカニズムの発見に至る背景から、これをがん腫瘍組織に対する治療応用へとつなげる研究成果についてご講演頂きました。さらに米国癌学会(AACR)とのジョイントシンポジウムおよび日本病理学会・日本臨床検査医学会との合同シンポジウムでは、それぞれがんゲノムの基礎研究成果の発表とゲノム医療を推進するための品質・精度管理のあり方について討論がなされました。

本学術総会のハイライトの1つであるコアシンポジウム Cancer immunotherapy (がん免疫治療の最先端)では保仙直毅博士(大阪大学)、Suzanne Topalian 博士(Johns Hopkins Univ.)、Andrew Pardoll 博士(Johns Hopkins Univ.)、2018年ノーベル生理学賞受賞である本庶佑博士(京都大学)にご講演頂きました。どの演者もがん免疫治療分野の最先端を代表する研究者であり、最も大きなメインホールにて多数の聴衆が参加した盛大なシンポジウムとなりました。保仙博士はCAR-T細胞療法についての現状とインテグリンをターゲットにした多発性骨髄腫治療の最新の研究を、Topalian 博士はPD-1阻害抗体治療の現状と問題点とバイオマーカーの最新の研究を、Pardoll 博士はPD-1阻害に不応性のメカニズムに関して最新の研究を、本庶先生はPD-1の発見から始まりPD-1抗体治療に至るまでの過程とPD-1抗体を中心とした併用治療に関する最新の研究についてご発表頂きました。どの研究も、現在のがん免疫治療を大幅に改善できることを示す有意義な発表であり、Topalian 博士はその中でも、主にメラノーマを中心とした臨床研究に基づき、臨床で現在

用いられている治療効果予測バイオマーカーや今後の新規バイオマーカーを中心に議論して頂きました。今後のがん免疫治療の方向性を検討する上で核心に迫る議論となり、本シンポジウムには欠かせないものとなりました。

腫瘍別シンポジウムを中心に専門性に優れた成果発表の場を、海外研究者を座長に配した国際セッションを中心に海外演者との討論の場を数多くもうけました。モーニングレクチャーやがん研究入門コースでは、国内トップレベルの研究者らにより、免疫療法、三次元培養モデル、創薬、AI、公共データベースの活用法といったがん研究の最前線について、専門外の研究者にも分かりやすく解説して頂きました。また若手研究者らが中心となり、将来のがん研究の方向性を議論する試みや留学を志す大学院生に向けた情報発信の企画も盛り込みました。

さらに研究者間の交流だけでなく、患者と研究者の交流をとりもつ「サバイバー・科学者 プログラム」(略称 SSP プログラム)では、患者の視点から考えるがん研究のあり方も活発に議論を行いました。参加された患者の方々にも実際にポスター発表を行って頂き、多くの研究者がその議論に参加し、意義深い研究および人的交流の場になりました。

ポスター演題では3日間で1200題近くの発表があり、本年度も各セッションに座長を配して聴衆と一緒に質疑・応答をする形式で行いました。各ポスターボードの前では若手のみならずシニアの研究者も一緒になり、発表時間を超えて熱のこもった議論が繰り広げられ、分野・年代の垣根を超えた新しい研究への展開を予感させる討論の場となりました。

このように世代・研究背景・国籍の異なる多くの研究者が一同に集うことで、今後の加速的な研究の進展とともに臨床・医療への応用へとつながる大変有意義な国際学会を開催することができました。これも京都大学教育研究振興財団よりご支援いただきましたお蔭です。この場をお借りして心より感謝申し上げます。